

未来に伝える沖繩戦

沖繩尚学高等学校・附属中学校

二年 上原 晴美

昨年より始まった、ある新聞の『未来に伝える沖繩戦』という戦争体験者の証言をずっと読んできました。

私は息がつまりそうでした。なぜなら、そこには、体験者の方々のあまりにも悲惨な、苦しみや悲しみが心の深い傷と共に、綴られていたからです。と同時に、体験を語った方達の元氣な姿に触れ、少しの安堵感も覚ええました。あの戦争を生き抜き、苦しみを使命感に変え、懸命に語る姿に感動したからです。そして、その気持ちに応えたいと心の底から思いました。

昭和二十年四月一日、沖繩本島上陸――。

物量に物言わせ、こんな小さな島。沖繩を全て焼きつくすかのように。空には、大量の米軍機。海を埋めつくす程の軍艦。米軍の空襲や艦砲射撃の中を逃げ惑う「地獄の日々」を送った沖繩の人達。ある人は、米軍による爆撃で母親を亡くし、目の前で火炎放射機により姉と妹も、一瞬で黒焦げになってしまったとありました。また、衛生状態の悪い収容所では、マラリアで毎日死ぬ人が多かった極限の生活なので、誰も泣かない。涙も枯れてしまったと激白していました。

証言には、日本兵の卑怯な姿がありました。食糧を民間人から奪ったり、赤ちゃんを抱きかかえる母親を、敵に見つかるからと壕から追い出し、時には、泣き止まぬ赤ちゃんの息を止めたり、また、守るべき住民をスパイ扱いにし、こん棒でなぐり殺したりと「友軍」と呼ばれる日本軍は、住民を守るどころか、最も恐ろしかったと語る人もいました。証言から垣間見る沖繩戦には、何の武器も持たない民間人が逃げ惑い、人間が人間で無くなる地獄の中で、たくさんの尊い犠牲がはらわれていたのです。

私は、新聞の写真で、体験者の握られたこぶしを見た時、こぶしの中に六十七年前の悲しみがつまっているように見えました。その悲しみを少しでもこぼさないように、こぶしは、強く強く、握られていたのだと感じました。「語らない」のではなく「語れなかった」戦争体験者の、悲痛な叫びが心に感じてなりません。親を失い、兄弟を全て失い、戦争孤児になった小さな男の子。爆撃で手足を失ったおばあさん。家族や全てを失い、今なお、心が病んでいる人。たくさんの人達が、あの惨たらしい戦争によって、人生が大きくかわったのだと思います。きっと、多くの人が生き抜く事の辛さにもがき苦しんだでしょう。六十七年間、その苦しみを背負い、悲しみと共に生き抜く事。それは、とても壮絶な人生だったのではないのでしょうか。それを、今のお年寄りの方々は、ものすごい勢いで、急速に変わりゆく時代の中を、歯をくいしばって、生き抜いてこられました。

去年、あるおばあさんの会話に、

「あんたの所は何名ね〜?」

「私のところは三名よ〜」

「私は全部よ」

と屈託なく、話をしていました。最初はよくわからなかったのですが、やがて、それが、戦争で亡くなった家族の数だと知りました。小柄なか細い体で語るあの明るさは、絶望を乗り越えて生

きてきた、沖縄の人達の強さだと深く感動しました。

新聞で語って下さったあの方々は、掲載された以上の苦しみがあったと思われます。これまで語れなかった証言を、今この時に、私達世代に語って下さる、その思いは、二度と戦争を起こしてはいけない、風化させてはならないという、強い覚悟を感じてなりません。

体験者の方々が生きて、生き抜いて伝えて下さったこの“心”は沖縄の「宝」だと思います。それは、時が流れ、どんなに時代が変わろうとも、絶対に見失ってはなりません。

「証言」を聞くとは、そういう魂の責任を担う事だと思えました。沖縄に生まれた者として過去から目をそらさず、「知る」という努力を惜しまず、そして、誰よりも平和を求め、未来に伝える行動を起こしていきます。

沖縄の「平和の心」を――。